

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 特許公報(B2)

(11) 特許番号

特許第6215214号
(P6215214)

(45) 発行日 平成29年10月18日(2017.10.18)

(24) 登録日 平成29年9月29日(2017.9.29)

(51) Int.Cl.

B01J 31/22 (2006.01)
C08F 8/04 (2006.01)
C08C 19/02 (2006.01)

F 1

B01J 31/22
C08F 8/04
C08C 19/02

Z

請求項の数 5 (全 27 頁)

(21) 出願番号 特願2014-536818 (P2014-536818)
 (86) (22) 出願日 平成25年9月12日 (2013.9.12)
 (86) 国際出願番号 PCT/JP2013/074749
 (87) 国際公開番号 WO2014/046017
 (87) 国際公開日 平成26年3月27日 (2014.3.27)
 審査請求日 平成28年7月19日 (2016.7.19)
 (31) 優先権主張番号 特願2012-208283 (P2012-208283)
 (32) 優先日 平成24年9月21日 (2012.9.21)
 (33) 優先権主張国 日本国 (JP)

(73) 特許権者 000000033
 旭化成株式会社
 東京都千代田区神田神保町一丁目105番地
 (74) 代理人 100079108
 弁理士 稲葉 良幸
 (74) 代理人 100109346
 弁理士 大貫 敏史
 (74) 代理人 100117189
 弁理士 江口 昭彦
 (74) 代理人 100134120
 弁理士 内藤 和彦
 (72) 発明者 荒木 祥文
 東京都千代田区神田神保町一丁目105番地

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】水素添加用触媒組成物及び当該水素添加用触媒組成物を用いた水素添加方法

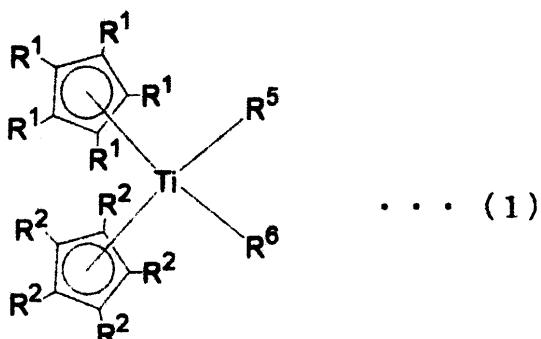
(57) 【特許請求の範囲】

【請求項 1】

下記 (A)、(B)、(C)、(D) を含む水素添加用触媒組成物であって、
 (C) と (A) との質量比 (= (C) / (A)) が、0.1 ~ 4.0 であり、
 (D) と (A) との質量比 (= (D) / (A)) が、0.01 ~ 1.00 である、
 水素添加用触媒組成物。

(A) : 下記一般式 (1) で示されるチタノセン化合物

【化 1】



(一般式 (1) 中、R⁵、R⁶ は、水素、C1 ~ C12の炭化水素基、アリーロキシ基、アルコキシ基、ハロゲン基、及びカルボニル基からなる群より選択されるいずれかの基を表し、R⁵、R⁶は同一でも異なっていてもよい。R¹、R²は、水素及びC1 ~ C12の炭化水

素基からなる群より選択されるいづれかの基を表し、R¹、R²は同一でも異なっていてもよい。但し、R¹及びR²が全て水素又は全てC1～C12の炭化水素基である場合を除く。)

(B) : Li、Na、K、Al元素からなる群より選ばれる、一つ以上の元素を含有する化合物であって、メチルリチウム、エチルリチウム、n-プロピルリチウム、イソプロピルリチウム、n-ブチルリチウム、sec-ブチルリチウム、イソブチルリチウム、t-ブチルリチウム、n-ペンチルリチウム、n-ヘキシルリチウム、フェニルリチウム、シクロペンタジエニルリチウム、m-トリルリチウム、p-トリルリチウム、キシリルリチウム、メチルナトリウム、エチルナトリウム、n-プロビルナトリウム、イソプロビルナトリウム、n-ブチルナトリウム、sec-ブチルナトリウム、イソブチルナトリウム、t-ブチルナトリウム、n-ペンチルナトリウム、n-ヘキシルナトリウム、フェニルナトリウム、シクロペンタジエニルナトリウム、m-トリルナトリウム、p-トリルナトリウム、キシリルナトリウム、ナトリウムナフタレン、メチルカリウム、エチルカリウム、n-プロビルカリウム、イソプロビルカリウム、n-ブチルカリウム、sec-ブチルカリウム、イソブチルカリウム、t-ブチルカリウム、n-ペンチルカリウム、n-ヘキシリカリウム、トリフェニルメチルカリウム、フェニルカリウム、フェニルエチルカリウム、シクロペンタジエニルカリウム、m-トリルカリウム、p-トリルカリウム、キシリルカリウム、カリウムナフタレン、トリメチルアルミニウム、トリエチルアルミニウム、トライソブチルアルミニウム、トリフェニルアルミニウム、ジエチルアルミニウムクロリド、ジメチルアルミニウムクロリド、エチルアルミニウムジクロライド、メチルアルミニウムセスキクロリド、エチルアルミニウムセスキクロリド、ジエチルアルミニウムヒドリド、ジイソブチルアルミニウムヒドリド、トリフェニルアルミニウム、トリ(2-エチルヘキシル)アルミニウム、及び(2-エチルヘキシル)アルミニウムジクロリドからなる群より選ばれる1種又は2種以上

(C) : 分子量が400以下の不飽和化合物であって、4～12個の炭化水素を有する共役ジエン、ビニル芳香族化合物、ノルボルナジエン、2,3-ジヒドロジシクロペンタジエン、アセチレン類、及びこれらの重合体、並びにオクテン及び1,7-オクタジエンからなる群より選ばれる1種又は2種以上

(D) : 極性化合物であって、エーテル化合物、チオエーテル化合物、ケトン化合物、スルホキシド化合物、カルボン酸化合物、カルボン酸エステル化合物、アルデヒド化合物、ラクタム化合物、ラクトン化合物、アミン化合物、及びアミド化合物からなる群より選ばれる1種又は2種以上

【請求項2】

前記(C)中の不飽和基量が、当該(C)1molあたり2mol以上である、請求項1に記載のオレフィン化合物の水素添加用触媒組成物。

【請求項3】

前記(B)が有機リチウム化合物である、請求項1又は2に記載の水素添加用触媒組成物。

【請求項4】

請求項1乃至3のいづれか一項に記載の水素添加用触媒組成物の存在下で、オレフィン性不飽和二重結合含有化合物を、不活性有機溶媒中にて水素と接触させる、水素添加方法。

【請求項5】

前記オレフィン性不飽和二重結合含有化合物が、共役ジエン系重合体、又は共役ジエンとビニル芳香族炭化水素との共重合体である、請求項4に記載の水素添加方法。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本発明は、水素添加用触媒組成物及び当該水素添加用触媒組成物を用いてオレフィン性不飽和二重結合含有化合物(以下、単にオレフィン化合物と記載する場合もある。)を選

10

20

30

40

50

択的に水素添加（以下、単に「水添」と記載する場合がある。）する方法に関する。

【背景技術】

【0002】

従来から、オレフィン化合物に対する水添工程に用いる水添触媒としては、一般的に、不均一系触媒と均一系触媒とが知られている。

前者の不均一系触媒は、広く工業的に用いられているが、後者の均一系触媒と比べると一般に活性が低く、所望の水添反応を行うためには多量の触媒を要し、さらには高温高圧下で行われるので不経済となるという問題を有している。

一方、後者の均一系触媒は、通常均一系で水添反応が進行するので不均一系と比べると活性が高く触媒使用量が少なくて済み、より低温、低圧で水添できるという特徴を有しているが、反面、触媒調製が煩雑で触媒自体の安定性も十分であるとは言えず、再現性にも劣り副反応を併発しやすいという欠点を有している。また、立体障害を有するアルキル置換のオレフィン性不飽和二重結合を水添する場合において十分な水添活性が得られないという問題も有している。10

上述したことから、高活性で取扱いの容易な水添触媒の開発が強く望まれているのが現状である。

【0003】

一方、オレフィン性不飽和二重結合を含有する重合体は、不飽和二重結合が加硫等に有利に利用される反面、かかる二重結合を有していることにより、耐熱性、耐酸化性等の安定性に劣るという欠点を有している。このような安定性に劣るという欠点は、重合体を水添して重合体鎖中の不飽和二重結合をなくすことにより著しく改善される。20

しかし、重合体を水添する場合には、低分子化合物を水添する場合に比べて、反応系の粘度や重合体鎖の立体障害等の影響を受けるため、水添しにくい。さらに水添終了後、触媒を物理的に除去することが極めて難しく、実質上完全に分離することができない等の欠点がある。

【0004】

上述したように、多量の使用を必要とせず経済的に有利で、貯蔵安定性も高く、かつ立体障害を有するオレフィン系不飽和二重結合を水添する場合においても十分な水添活性を発揮でき、かつ水添後の分離除去が容易な水添触媒を得ることが従来より課題とされている。30

【0005】

かかる課題に鑑み、特許文献1及び2には、特定のチタノセン化合物とアルキルリチウムとを組み合わせてオレフィン化合物を水添する方法、特許文献3及び4には、メタロセン化合物と有機アルミニウム、亜鉛、及びマグネシウムを組み合わせてオレフィン性不飽和（共）重合体を水添する方法、特許文献5及び6には、特定のチタノセン化合物とアルキルリチウムとを組み合わせてオレフィン性不飽和基含有リビングポリマーを水添させる方法が開示されている。

また、特許文献7には、特定のチタノセン化合物とアルコキシリチウムとを組み合わせてオレフィン性不飽和二重結合含有ポリマー中のオレフィン性二重結合を水添する方法が開示されている。なお、この方法ではさらに還元剤としてアルコキシリチウム以外の高価な有機金属化合物を必要としている。40

さらに、特許文献8には、特定のチタノセン化合物とオレフィン化合物と還元剤とを組み合わせてオレフィン性不飽和二重結合含有ポリマーを水添する方法が開示されている。

さらにまた、特許文献9には、シクロペニタジエニル基の5個の水素を全てメチル基に置換したペンタメチルシクロエンタジエニル基を有するメタロセン化合物と還元剤とを組み合わせてオレフィン化合物を水添する方法が開示されている。

またさらに、特許文献10及び11には、特定のチタノセン化合物、還元剤、オレフィン性不飽和二重結合含有重合体、及び極性化合物を含む水素添加用触媒組成物でオレフィン化合物を水添する方法が開示されている。

また、特許文献12には、特定のメタロセン化合物と、共役ジエン单量体、アセチレン50

系化合物及びアセチレン系单量体から選ばれる化合物を含む水素添加用触媒組成物によりオレフィン化合物を水添する方法が開示されている。

【先行技術文献】

【特許文献】

【0006】

【特許文献1】特開昭61-33132号公報

【特許文献2】特開平1-53851号公報

【特許文献3】特開昭61-28507号公報

【特許文献4】特開昭62-209103号公報

【特許文献5】特開昭61-47706号公報

10

【特許文献6】特開昭63-5402号公報

【特許文献7】特開平1-275605号公報

【特許文献8】特開平2-172537号公報

【特許文献9】特開平4-96904号公報

【特許文献10】特開平08-33846号公報

【特許文献11】特開平08-41081号公報

【特許文献12】特開2004-269665号公報

【発明の概要】

【発明が解決しようとする課題】

【0007】

20

しかしながら、上述した従来提案されている技術においては、いずれも、水素添加用触媒として特性上未だ十分ではない。

そこで、本発明においては、経済的に有利にオレフィン性不飽和二重結合含有化合物（オレフィン性不飽和二重結合を含有する重合体を含む）を水添可能であり、貯蔵安定性に優れ、フィード性が良好で、水添工程により無色性に優れた重合体を製造可能な、水素添加用触媒組成物を提供することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

【0008】

本発明者らは、前記従来技術の課題を解決するために鋭意研究を重ねた結果、(A)所定のチタノセン化合物、(B)所定の元素を含有する化合物、(C)所定の不飽和化合物、(D)所定の極性化合物を含有する水素添加用触媒組成物において、前記(C)成分と前記(A)成分との質量比((C)/(A))の範囲、及び前記(D)成分と前記(A)成分との質量比((D)/(A))の範囲を特定することにより、上述した従来技術の課題を解決し得ることを見出し、本発明を完成させるに至った。

30

すなわち、本発明は以下の通りである。

【0009】

[1]

下記(A)、(B)、(C)、(D)を含む水素添加用触媒組成物であって、

(C)と(A)との質量比(=(C)/(A))が、0.1~4.0であり、

(D)と(A)との質量比(=(D)/(A))が、0.01~1.00である、

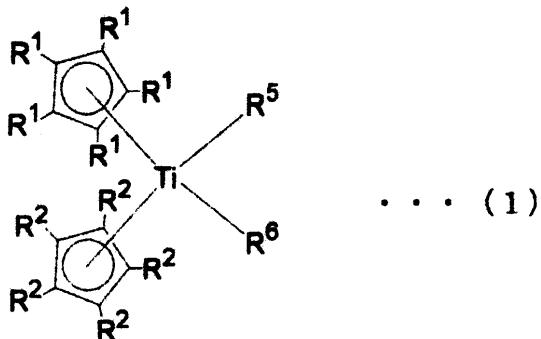
40

水素添加用触媒組成物。

(A)：下記一般式(1)で示されるチタノセン化合物

【0010】

【化1】



【0011】

前記一般式(1)中、R⁵、R⁶は、水素、C1～C12の炭化水素基、アリーロキシ基、アルコキシ基、ハロゲン基、及びカルボニル基からなる群より選択されるいずれかの基を表し、R⁵、R⁶は同一でも異なっていてもよい。R¹、R²は、水素及びC1～C12の炭化水素基からなる群より選択されるいずれかの基を表し、R¹、R²は同一でも異なっていてもよい。但し、R¹及びR²が全て水素又は全てC1～C12の炭化水素基である場合を除く。

【0012】

(B) : Li、Na、K、Mg、Zn、Al、Ca元素からなる群より選ばれる、一つ以上の元素を含有する化合物

(C) : 分子量が400以下の不飽和化合物

(D) : 極性化合物

【0013】

〔2〕

前記(C)中の不飽和基量が、当該(C)1molあたり2mol以上である、前記〔1〕に記載のオレフィン化合物の水素添加用触媒組成物。

〔3〕

前記(B)が有機リチウム化合物である、前記〔1〕又は〔2〕に記載の水素添加用触媒組成物。

〔4〕

前記〔1〕乃至〔3〕のいずれか一に記載の水素添加用触媒組成物の存在下で、オレフィン性不飽和二重結合含有化合物を、不活性有機溶媒中にて水素と接触させる、水素添加方法。

〔5〕

前記オレフィン性不飽和二重結合含有化合物が、共役ジエン系重合体、又は共役ジエンとビニル芳香族炭化水素との共重合体である、前記〔4〕に記載の水素添加方法。

【発明の効果】

【0014】

本発明によれば、水添活性が高く、フィード性が良好で貯蔵安定性が高く、かつ無色性に優れた水添オレフィン化合物を製造可能な、水素添加用触媒組成物を提供できる。

【発明を実施するための形態】

【0015】

以下、本発明を実施するための形態(以下、「本実施形態」と言う。)について詳細に説明する。

以下の本実施形態は、本発明を説明するための例示であり、本発明を以下の内容に限定する趣旨ではない。本発明は、その要旨の範囲内で適宜に変形して実施することができる。

【0016】

〔水素添加用触媒組成物〕

本実施形態の水素添加用触媒組成物は、後述する(A)、(B)、(C)、(D)を含

む水素添加用触媒組成物であって、下記(C)と下記(A)との質量比(= (C) / (A))が0.1~4.0の範囲であり、下記(D)と下記(A)との質量比(= (D) / (A))が、0.01~1.00の範囲である、水素添加用触媒組成物である。

【0017】

(水素添加用触媒組成物を構成する成分)

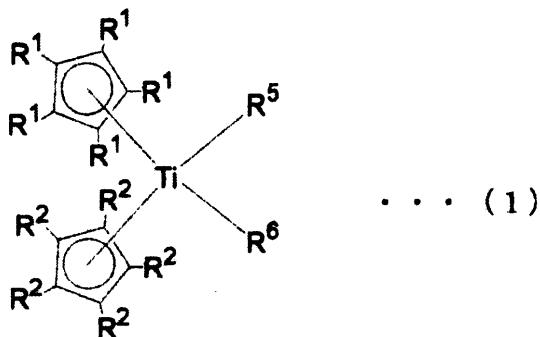
以下、本実施形態の水素添加用触媒組成物を構成する成分について詳細に説明する。

< (A) 成分 : チタノセン化合物 >

(A) 成分 : チタノセン化合物(本明細書中、単に(A)成分、(A)と記載する場合もある。)は、下記一般式(1)で示される。

【0018】

【化2】



10

20

【0019】

前記一般式(1)中、R⁵、R⁶は、水素、C1~C12の炭化水素基、アリーロキシ基、アルコキシ基、ハロゲン基及びカルボニル基からなる群より選択されるいずれかの基を表し、R⁵、R⁶は同一でも異なっていてもよい。

R¹、R²は、水素及びC1~C12の炭化水素基からなる群より選択されるいずれかの基を表し、R¹、R²は同一でも異なっていてもよい。但し、R¹、R²が全て水素又は全てC1~C12の炭化水素基である場合を除く。

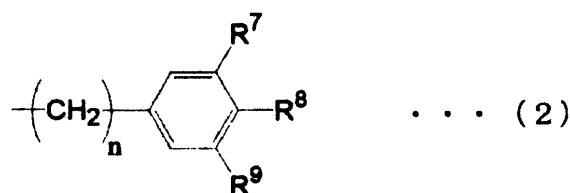
【0020】

前記一般式(1)中、R¹、R²、R⁵、R⁶のC1~C12の炭化水素基として、例えば、下記一般式(2)で表される置換基も含まれる。

30

【0021】

【化3】



【0022】

なお、R⁷~R⁹は、水素又はC1~C4のアルキル炭化水素基を示し、R⁷~R⁹のうちの少なくともいずれかは水素であり、n=0又は1である。

40

【0023】

(A) 成分 : チタノセン化合物としては、以下の例に限定されるものではないが、例えば、ビス((5)-メチルシクロペントジエニル)チタニウムジヒドリド、ビス((5)-1,3-ジメチルシクロペントジエニル)チタニウムジヒドリド、ビス((5)-エチルシクロペントジエニル)チタニウムジヒドリド、ビス((5)-プロピルシクロペントジエニル)チタニウムジヒドリド、ビス((5)-n-ブチルシクロペントジエニル)チタニウムジヒドリド、ビス((5)-メチルシクロペントジエニル)チタニウムジメチル、ビス((5)-1,3-ジメチルシクロペントジエニル)チタニウムジメチル、ビス((5)-エチルシクロペントジエニル)チタニウムジメチル、ビス(

50

シクロペニタジエニル)チタニウムクロライドエトキサイド、ビス((5) - エチルシクロペニタジエニル)チタニウムクロライドエトキサイド、ビス((5) - プロピルシクロペニタジエニル)チタニウムクロライドエトキサイド、ビス((5) - n - ブチルシクロペニタジエニル)チタニウムクロライドエトキサイド、ビス((5) - メチルシクロペニタジエニル)チタニウムクロライドフェノキサイド、ビス((5) - 1 , 3 - ジメチルシクロペニタジエニル)チタニウムクロライドフェノキサイド、ビス((5) - エチルシクロペニタジエニル)チタニウムクロライドフェノキサイド、ビス((5) - プロピルシクロペニタジエニル)チタニウムクロライドフェノキサイド、ビス((5) - n - ブチルシクロペニタジエニル)チタニウムジベンジル、ビス((5) - 1 , 3 - ジメチルシクロペニタジエニル)チタニウムジベンジル、ビス((5) - エチルシクロペニタジエニル)チタニウムジベンジル、ビス((5) - n - ブチルシクロペニタジエニル)チタニウムジベンジル、ビス((5) - メチルシクロペニタジエニル)チタニウムジカルボニル、ビス((5) - 1 , 3 - ジメチルシクロペニタジエニル)チタニウムジカルボニル、ビス((5) - エチルシクロペニタジエニル)チタニウムジカルボニル、ビス((5) - プロピルシクロペニタジエニル)チタニウムジカルボニル、ビス((5) - n - ブチルシクロペニタジエニル)チタニウムジカルボニル等が挙げられる。
これらは、1種のみを単独で用いてもよく、2種以上を組み合わせて用いてもよい。

これらアルキル基置換のシクロペニタジエニル基を有するチタノセン化合物は、上述した例に限定されず、上記以外の、シクロペニタジエニル環のアルキル基の置換数が2、3、4のものも好適に用いられる。

【0024】

上述した各種チタノセン化合物を用いることにより、本実施形態の水素添加用触媒組成物は、オレフィン化合物（オレフィン性不飽和二重結合含有化合物、以下、単にオレフィン化合物と記載する場合がある。）のオレフィン性不飽和二重結合を高位に水添し、かつ水添後のオレフィン化合物の耐熱性に優れたものとなる。特に共役ジエン系重合体又は共役ジエンとビニル芳香族炭化水素との共重合体中のオレフィン性不飽和二重結合に対する水添活性が高く、かつ広い温度領域中で不飽和二重結合を高位にかつ選択的に水添する水素添加用触媒組成物を得るために、（A）チタノセン化合物としては、以下の化合物が好ましい。例えば、ビス((5) - メチルシクロペニタジエニル)チタニウムジクロライド、ビス((5) - エチルシクロペニタジエニル)チタニウムジクロライド、ビス((5) - プロピルシクロペニタジエニル)チタニウムジクロライド、ビス((5) - n - ブチルシクロペニタジエニル)チタニウムジクロライド、ビス((5) - メチルシクロペニタジエニル)チタニウムジメチル、ビス((5) - エチルシクロペニタジエニル)チタニウムジメチル、ビス((5) - プロピルシクロペニタジエニル)チタニウムジメチル、ビス((5) - n - ブチルシクロペニタジエニル)チタニウムジメチル、ビス((5) - メチルシクロペニタジエニル)チタニウムジ(p - トリル)、ビス((5) - エチルシクロペニタジエニル)チタニウムジ(p - トリル)、ビス((5) - プロピルシクロペニタジエニル)チタニウムジ(p - トリル)、ビス((5) - n - ブチルシクロペニタジエニル)チタニウムジ(p - トリル)、ビス((5) - メチルシクロペニタジエニル)チタニウムジフェニル、ビス((5) - エチルシクロペニタジエニル)チタニウムジフェニル、ビス((5) - プロピルシクロペニタジエニル)チタニウムジフェニル、ビス((5) - n - ブチルシクロペニタジエニル)チタニウムジフェニルが挙げられる。

さらに、空気中でも安定して取り扱えるという観点からは、（A）チタノセン化合物としては、以下に限定されるものではないが、例えば、ビス((5) - メチルシクロペニタジエニル)チタニウムジクロライド、ビス((5) - n - ブチルシクロペニタジエニル)チタニウムジクロライド、ビス((5) - メチルシクロペニタジエニル)チタニウムジフェニル、ビス((5) - n - ブチルシクロペニタジエニル)チタニウムジフェニルが挙げられる。

ル、ビス((5)-メチルシクロペンタジエニル)チタニウムジ(p - トリル)、ビス((5)-n - ブチルシクロペンタジエニル)チタニウムジ(p - トリル)が好適なものとして挙げられる。

【0025】

上述した(A)成分：チタノセン化合物は、例えば、アルキル置換基を有するシクロペンタジエニル基を有する四価のチタノセンハロゲン化合物とアリールリチウムとを反応させることによって合成することができる。合成したチタノセン化合物の構造は、1H-NMR、MSスペクトルによって特定することができる。

【0026】

<(B)成分：所定の元素を含有する化合物>

10

所定の元素を含有する化合物(B)(本明細書中、単に(B)成分、(B)と記載する場合もある。)としては、上述した(A)成分のチタノセン化合物を還元する能力のある公知の有機金属化合物・含金属化合物のうち、Li、Na、K、Mg、Zn、Al、Ca元素からなる群より選ばれる、一つ以上の元素を含有する化合物が用いられる。

(B)成分：所定の元素を含有する化合物としては、有機リチウム化合物、有機ナトリウム化合物、有機カリウム化合物、有機亜鉛化合物、有機マグネシウム化合物、有機アルミニウム化合物、有機カルシウム化合物等を挙げられる。これらは、1種のみを単独で用いてもよく、2種以上を併用してもよい。

【0027】

(B)成分としての有機リチウム化合物は、以下に限定されるものではないが、例えば、メチルリチウム、エチルリチウム、n - プロピルリチウム、イソプロピルリチウム、n - ブチルリチウム、sec - ブチルリチウム、イソブチルリチウム、t - ブチルリチウム、n - ペンチルリチウム、n - ヘキシリルリチウム、フェニルリチウム、シクロペンタジエニルリチウム、m - トリルリチウム、p - トリルリチウム、キシリルリチウム、ジメチルアミノリチウム、ジエチルアミノリチウム、メトキシリチウム、エトキシリチウム、n - プロポキシリチウム、イソプロポキシリチウム、n - ブトキシリチウム、sec - ブトキシリチウム、t - ブトキシリチウム、ペンチルオキシリチウム、ヘキシリルオキシリチウム、ヘプチルオキシリチウム、オクチルオキシリチウム、フェノキシリチウム、4 - メチルフェノキシリチウム、ベンジルオキシリチウム、4 - メチルベンジルオキシリチウム等が挙げられる。

20

【0028】

また、(B)成分としては、フェノール系安定剤と、前記各種アルキルリチウムを反応させて得られるリチウムフェノラート化合物も使用することができる。

かかるフェノール系安定剤としては、以下に限定されるものではないが、例えば、1 - オキシ - 3 - メチル - 4 - イソプロピルベンゼン、2 , 6 - ジ - t - ブチルフェノール、2 , 6 - ジ - t - ブチル - 4 - エチルフェノール、2 , 6 - ジ - t - ブチル - p - クレゾール、2 , 6 - ジ - t - ブチル - 4 - n - ブチルフェノール、4 - ヒドロキシメチル - 2 , 6 - ジ - t - ブチルフェノール、ブチルヒドロキシアニソール、2 - (1 - メチルシクロヘキシル) - 4 , 6 - ジメチルフェノール、2 , 4 - ジメチル - 6 - t - ブチルフェノール、2 - メチル - 4 , 6 - ジノニルフェノール、2 , 6 - ジ - t - ブチル - - ジメチルアミノ - p - クレゾール、メチレン - ビス - (ジメチル - 4 , 6 - フェノール)、2 , 2' - メチレン - ビス - (4 - メチル - 6 - t - ブチルフェノール)、2 , 2' - メチレン - ビス - (4 - メチル - 6 - シクロヘキシルフェノール)、2 , 2' - メチレン - ビス - (4 - エチル - 6 - t - ブチルフェノール)、4 , 4' - メチレン - ビス - (2 , 6 - ジ - t - ブチルフェノール)、2 , 2' - メチレン - ビス - (6 - - メチル - ベンジル - p - クレゾール)等が挙げられる。

40

上記具体例のうち、最も汎用的な2 , 6 - ジ - t - ブチル - p - クレゾールの水酸基を-O-Liとした2 , 6 - ジ - t - ブチル - 4 - メチルフェノキシリチウムが特に好適に使われる。

【0029】

50

また、(B)成分としての有機リチウム化合物としては、上記の他、トリメチルシリルリチウム、ジエチルメチルシリルリチウム、ジメチルエチルシリルリチウム、トリエチルシリルリチウム、トリフェニルシリルリチウム等の有機ケイ素リチウム化合物も挙げられる。

【0030】

(B)成分としての有機ナトリウム化合物としては、以下に限定されるものではないが、例えば、メチルナトリウム、エチルナトリウム、n-プロピルナトリウム、イソプロピルナトリウム、n-ブチルナトリウム、sec-ブチルナトリウム、イソブチルナトリウム、t-ブチルナトリウム、n-ペンチルナトリウム、n-ヘキシルナトリウム、フェニルナトリウム、シクロペニタジエニルナトリウム、m-トリルナトリウム、p-トリルナトリウム、キシリルナトリウム、ナトリウムナフタレン等が挙げられる。10

【0031】

(B)成分としての有機カリウム化合物としては、以下に限定されるものではないが、例えば、メチルカリウム、エチルカリウム、n-プロピルカリウム、イソプロピルカリウム、n-ブチルカリウム、sec-ブチルカリウム、イソブチルカリウム、t-ブチルカリウム、n-ペンチルカリウム、n-ヘキシルカリウム、トリフェニルメチルカリウム、フェニルカリウム、フェニルエチルカリウム、シクロペニタジエニルカリウム、m-トリルカリウム、p-トリルカリウム、キシリルカリウム、カリウムナフタレン等が挙げられる。20

【0032】

(B)成分としての、上記有機アルカリ金属化合物、有機アルカリ土類金属化合物の一部は、共役ジエン化合物及び/又はビニル芳香族炭化水素化合物のリビングアニオン重合開始剤としても用いられるが、被水添物であるオレフィン化合物が、これら金属の活性末端を有する共役ジエン系重合体、または共役ジエンとビニル芳香族炭化水素との共重合体(リビングポリマー)である場合、これらの活性末端も(B)成分として作用する。

【0033】

(B)成分としての有機亜鉛化合物としては、以下に限定されるものではないが、例えば、ジエチル亜鉛、ビス((5)-シクロペニタジエニル)亜鉛、ジフェニル亜鉛等が挙げられる。

【0034】

(B)成分としての有機マグネシウム化合物としては、以下に限定されるものではないが、例えば、ジメチルマグネシウム、ジエチルマグネシウム、ジブチルマグネシウム、エチルブチルマグネシウム、メチルマグネシウムプロマイド、エチルマグネシウムクロライド、エチルマグネシウムプロマイド、エチルマグネシウムクロライド、フェニルマグネシウムプロマイド、フェニルマグネシウムクロライド、t-ブチルマグネシウムクロライド、t-ブチルマグネシウムプロマイド等が挙げられる。30

【0035】

(B)成分としての有機アルミニウム化合物としては、以下に限定されるものではないが、例えば、トリメチルアルミニウム、トリエチルアルミニウム、トリイソブチルアルミニウム、トリフェニルアルミニウム、ジエチルアルミニウムクロリド、ジメチルアルミニウムクロリド、エチルアルミニウムジクロライド、メチルアルミニウムセスキクロリド、エチルアルミニウムセスキクロリド、ジエチルアルミニウムヒドリド、ジイソブチルアルミニウムヒドリド、トリフェニルアルミニウム、トリ(2-エチルヘキシル)アルミニウム、(2-エチルヘキシル)アルミニウムジクロリド、メチルアルミノキサン、エチルアルミノキサン等が挙げられる。40

【0036】

これらの他に、(B)成分としては、例えば、リチウムハイドライド、カリウムハイドライド、ナトリウムハイドライド、カルシウムハイドライド等のアルカリ(土類)金属水素化物や、ナトリウムアルミニウムハイドライド、カリウムアルミニウムハイドライド、ジイソブチルナトリウムアルミニウムハイドライド、トリ(t-ブトキシ)アルミニウム50

ハイドライド、トリエチルナトリウムアルミニウムハイドライド、ジイソブチルナトリウムアルミニウムハイドライド、トリエチルナトリウムアルミニウムハイドライド、トリエトキシナトリウムアルミニウムハイドライド、トリエチルリチウムアルミニウムハイドライド等の2種以上の金属を含有する水素化物も使用できる。

【0037】

また、上記有機アルカリ金属化合物と有機アルミニウム化合物とを予め反応させることで合成される錯体、有機アルカリ金属化合物と有機マグネシウム化合物とを予め反応させることで合成される錯体（アート錯体）等も、(B)成分として使用できる。

なお、(B)所定の元素を含有する化合物である有機金属化合物・含金属化合物としては、高い水添活性の観点から、Li、Alを含有する化合物が好ましい。より高い水添活性の点で、有機リチウム化合物がより好ましい。10

【0038】

<(C)成分：不飽和化合物>

不飽和化合物(C)(本明細書中、単に(C)成分、(C)と記載する場合がある。)とは、分子中に不飽和基を1つ以上有する分子量400以下の化合物である。

(C)成分の分子量は、水素添加用触媒組成物の貯蔵後のフィード性の観点から、400以下であるものとし、分子量300以下であることが好ましく、200以下がより好ましく、150以下がさらに好ましい。

(C)成分：不飽和化合物が重合体である場合は、所定のモノマーを重合することにより製造できる。20

前記モノマーとしては、以下に限定されるものではないが、例えば、1,3-ブタジエン、イソブレン、2,3-ジメチルブタジエン、1,3-ペントジエン、2-メチル-1,3-ペントジエン、1,3-ヘキサジエン、4,5-ジエチル-1,3-オクタジエン、3-ブチル-1,3-オクタジエン等の一般に4～約12個の炭化水素を有する共役ジエン、モノテルペン、ビニル芳香族化合物、ノルボルナジエン、シクロペントジエン、シクロヘキサジエン、2,3-ジヒドロジシクロペントジエン、アセチレン類が挙げられる。

これらのモノマーは、これらは、単独で用いてもよく、二種以上共重合させてもよい。

【0039】

本実施形態の水素添加用触媒組成物の貯蔵後のフィード性、本実施形態の水素添加用触媒組成物を用いて水添したオレフィン化合物のポリマーの黄変化が小さいという観点から、不飽和化合物(C)中の不飽和基量は、好ましい範囲が定まる。

すなわち、(C)中の不飽和基量は高い水添活性やフィード性の観点から、(C)1molあたり2mol以上であることが好ましい。高い水添活性やポリマーの黄変化抑制の観点から5mol以下であることが好ましい。2mol以上4mol以下の範囲であることがより好ましく、2mol以上3mol以下の範囲がさらに好ましく、3molがさらにより好ましい。

(C)成分中の不飽和基量は、NMRにより測定することができる。

【0040】

さらに、本実施形態の水素添加用触媒組成物は、その水添活性、貯蔵後のフィード性の観点から、(C)成分と(A)成分との質量比($= (C) / (A)$)が0.1以上であるものとし、本実施形態の水素添加用触媒組成物の水添活性、フィード性に関する貯蔵安定性、経済性、水添したオレフィン化合物のポリマーの黄変化抑制の観点から4.0以下であるものとする。

(C)成分と(A)成分との質量比($= (C) / (A)$)は、0.5～3.0の範囲が好ましく、1.0～2.5の範囲がより好ましい。

【0041】

さらにまた、本実施形態の水素添加用触媒組成物の貯蔵後のフィード性の観点から、(C)不飽和化合物の不飽和基量と、上述した(A)チタノセン化合物とのmol比($= (C)$ の不飽和基量/(A))が0.1以上であることが好ましく、本実施形態の水素添加40
50

用触媒組成物のフィード性に関する貯蔵安定性、経済性、ポリマーの黄変化抑制、高い水添活性の観点から、25以下であることが好ましい。

前記(C)の不飽和基量/(A)は、0.6~2.0の範囲がより好ましく、1.0~1.0の範囲がさらに好ましい。

【0042】

上述したように、(C)不飽和化合物の分子量が400以下であることにより、本実施形態の水素添加用触媒組成物において高い貯蔵後のフィード性が得られ、(C)成分と(A)成分との質量比(=(C)/(A))が0.1~4.0であることにより、高い水添活性、貯蔵後のフィード性、水添したオレフィン化合物のポリマー黄変化抑制効果が得られ、さらに、(C)の不飽和基量が(A)成分とのモル比において、上記範囲であることにより、水添対象である重合体中のオレフィン性不飽和二重結合以外への水素添加量を少なくすることができ、高い水添活性が得られる。10

【0043】

<(D)成分：極性化合物>

(D)成分：極性化合物(本明細書中、単に、(D)成分、(D)と記載する場合がある。)とは、N、OあるいはSを有する化合物であり、以下に限定されるものではないが、例えば、アルコール化合物、エーテル化合物、チオエーテル化合物、ケトン化合物、スルホキシド化合物、カルボン酸化合物、カルボン酸エステル化合物、アルデヒド化合物、ラクタム化合物、ラクトン化合物、アミン化合物、アミド化合物、ニトリル化合物、エポキシ化合物及びオキシム化合物が挙げられる。20

これら極性化合物としては、以下の化合物を具体例として挙げることができる。

【0044】

前記アルコール化合物としては、以下に限定されるものではないが、例えば、メチルアルコール、エチルアルコール、プロピルアルコール、n-ブチルアルコール、sec-ブチルアルコール、イソブチルアルコール、tert-ブチルアルコール、n-アミルアルコール、イソアミルアルコール、ヘキシリアルコール及びその異性体、ヘプチルアルコール及びその異性体、オクチルアルコール及びその異性体、カプリルアルコール、ノニルアルコール及びその異性体、デシルアルコール及びその異性体、ベンジルアルコール、フェノール、クレゾール、2,6-ジ-tert-ブチル-p-クレゾール等の一価アルコール、エチレングリコール、プロピレングリコール、ブタンジオール、ペンチルグリコール、ヘキシリグリコール、ヘプチルグリコール及びこれらの異性体であるグリコール(二価アルコール)等が挙げられる。また、グリセリン等の三価アルコールやエタノールアミン、グリシジルアルコール等、一分子中に他の官能基を有するアルコール化合物であってもよい。30

【0045】

前記エーテル化合物としては、以下に限定されるものではないが、例えば、ジメチルエーテル、ジエチルエーテル、ジ-n-プロピルエーテル、ジイソプロピルエーテル、ジ-n-ブチルエーテル、ジ-sec-ブチルエーテル、ジフェニルエーテル、メチルエチルエーテル、エチルブチルエーテル、ブチルビニルエーテル、アニソール、エチルフェニルエーテル、エチレングリコールジメチルエーテル、エチレングリコールジエチルエーテル、エチレングリコールジブチルエーテル、ジエチレングリコールジメチルエーテル、ジエチレングリコールジエチルエーテル、フラン、テトラヒドロフラン、-メトキシテトラヒドロフラン、ピラン、テトラヒドロピラン、ジオキサン等が挙げられる。40

また、テトラヒドロフランカルボン酸のように、分子中に他の官能基を有する化合物でもよい。

【0046】

前記チオエーテル化合物としては、以下に限定されるものではないが、例えば、ジメチルスルフィド、ジエチルスルフィド、ジ-n-ブチルスルフィド、ジ-sec-ブチルスルフィド、ジ-tert-ブチルスルフィド、ジフェニルスルフィド、メチルエチルスルフィド、エチルブチルスルフィド、チオアニソール、エチルフェニルスルフィド、チオフ50

エン、テトラヒドロチオフェン等が挙げられる。

【0047】

前記ケトン化合物としては、以下に限定されるものではないが、例えば、アセトン、ジエチルケトン、ジ-n-プロピルケトン、ジイソプロピルケトン、ジ-n-ブチルケトン、ジ-sec-ブチルケトン、ジ-tert-ブチルケトン、ベンゾフェノン、メチルエチルケトン、アセトフェノン、ベンジルフェニルケトン、プロピオフェノン、シクロペニタノン、シクロヘキサノン、ジアセチル、アセチルアセトン、ベンゾイルアセトン等が挙げられる。

【0048】

前記スルホキシド化合物としては、以下に限定されるものではないが、例えば、ジメチルスルホキシド、ジエチルスルホキシド、テトラメチレンスルホキシド、ペンタメチレンスルホキド、ジフェニルスルホキシド、ジベンジルスルホキシド、p-トリルスルホキシド等が挙げられる。

【0049】

前記カルボン酸化合物としては、以下に限定されるものではないが、例えば、蟻酸、酢酸、プロピオン酸、酪酸、カプロン酸、ラウリン酸、パルミチン酸、ステアリン酸、シクロヘキシリプロピオン酸、シクロヘキシリカプロン酸、安息香酸、フェニル酢酸、o-トルイル酸、m-トルイル酸、p-トルイル酸、アクリル酸、メタアクリル酸等の一塩基酸、蔥酸、マレイン酸、マロン酸、フマル酸、琥珀酸、アジピン酸、ピメリシン酸、スペリシン酸、セバシン酸、イタコン酸、フタル酸、イソフタル酸、テレフタル酸、ナフタル酸、ジフェン酸等の二塩基酸の他、トリメリット酸・ピロメリット酸及びそれらの誘導体が挙げられる。また、例えば、ヒドロキシ安息香酸のように一分子中に他の官能基を有する化合物であってもよい。

【0050】

前記カルボン酸エステルとしては、以下に限定されるものではないが、例えば、蟻酸、酢酸、プロピオン酸、酪酸、カプロン酸、ラウリン酸、パルミチン酸、ステアリン酸、シクロヘキシリプロピオン酸、シクロヘキシリカプロン酸、安息香酸、フェニル酢酸、o-トルイル酸、m-トルイル酸、p-トルイル酸、アクリル酸、メタアクリル酸等の一塩基酸、蔥酸、マレイン酸、マロン酸、フマル酸、琥珀酸、アジピン酸、ピメリシン酸、スペリシン酸、セバシン酸、イタコン酸、フタル酸、イソフタル酸、テレフタル酸、ナフタル酸、ジフェン酸等の二塩基酸と、メチルアルコール、エチルアルコール、プロピルアルコール、n-ブチルアルコール、sec-ブチルアルコール、イソブチルアルコール、tert-ブチルアルコール、n-アミルアルコール、イソアミルアルコール、ヘキシリアルコール及びその異性体、ヘプチルアルコール及びその異性体、オクチルアルコール及びその異性体、カプリルアルコール、ノニルアルコール及びその異性体、デシルアルコール及びその異性体、ベンジルアルコール、フェノール、クレゾール、グリシジルアルコール等のアルコール類とのエステル、アセト酢酸メチル、アセト酢酸エチル等の-ケトエステルが挙げられる。

【0051】

前記ラクトン化合物としては、以下に限定されるものではないが、例えば、-プロピオラクトン、-バレロラクトン、-カブロラクトン及び下記の酸に対応するラクトン化合物が挙げられる。

すなわち、前記酸としては、2-メチル-3-ヒドロキシプロピオン酸、3-ヒドロキシノナン又は3-ヒドロキシペラルゴン酸、2-デシル-3-ヒドロキシプロピオン酸、2-シクロペニチル-3-ヒドロキシプロピオン酸、2-n-ブチル-3-シクロヘキシリ-3-ヒドロキシプロピオン酸、2-フェニル-3-ヒドロキシトリデカン酸、2-(2-エチルシクロペニチル)-3-ヒドロキシプロピオン酸、2-メチルフェニル-3-ヒドロキシプロピオン酸、3-ベンジル-3-ヒドロキシプロピオン酸、2,2-ジメチル-3-ヒドロキシプロピオン酸、2-メチル-5-ヒドロキシバレリル酸、3-シクロヘキシリ-5-ヒドロキシバレリル酸、4-フェニル-5-ヒドロキシバレリル酸、2

10

20

30

40

50

- ヘプチル - 4 - シクロペンチル - 5 - ヒドロキシバレリル酸、3 - (2 - シクロヘキシルエチル) - 5 - ヒドロキシバレリル酸、2 - (2 - フェニルエチル) - 4 - (4 - シクロヘキシルベンジル) - 5 - ヒドロキシバレリル酸、ベンジル - 5 - ヒドロキシバレリル酸、3 - エチル - 5 - イソプロピル - 6 - ヒドロキシカプロン酸、2 - シクロペンチル - 4 - ヘキシル - 6 - ヒドロキシカプロン酸、2 - シクロペンチル - 4 - ヘキシル - 6 - ヒドロキシカプロン酸、3 - フェニル - 6 - ヒドロキシカプロン酸、3 - (3 , 5 - ジエチル - シクロヘキシル) - 5 - エチル - 6 - ヒドロキシカプロン酸、4 - (3 - フェニル - プロピル) - 6 - ヒドロキシカプロン酸、2 - ベンジル - 5 - イシブチル - 6 - ヒドロキシカプロン酸、7 - フェニル - 6 - ヒドロキシル - オクトエノ酸、2 , 2 - ジ (1 - シクロヘキセニル) - 5 - ヒドロキシ - 5 - ヘプテノ酸、2 , 2 - ジメチル - 4 - プロペニル - 3 - ヒドロキシ - 3 , 5 - ヘプタジエノ酸等が挙げられる。
10

【 0052 】

前記アミン化合物としては、以下に限定されるものではないが、例えば、メチルアミン、エチルアミン、イソプロピルアミン、n - ブチルアミン、sec - ブチルアミン、tert - ブチルアミン、n - アミルアミン、sec - アミルアミン、tert - アミルアミン、n - ヘキシルアミン、n - ヘプチルアミン、アニリン、ベンジルアミン、o - アニシジン、m - アニシジン、p - アニシジン、- ナフチルアミン、ジメチルアミン、ジエチルアミン、ジ - n - プロピルアミン、ジイソプロピルアミン、ジ - n - ブチルアミン、ジ - sec - ブチルアミン、ジイソブチルアミン、ジ - tert - ブチルアミン、ジ - n - アミルアミン、ジイソアミルアミン、ジベンジルアミン、N - メチルアニリン、N - エチルアニリン、N - エチル - o - トライジン、N - エチル - m - トライジン、N - エチル - p - トライジン、トリエチルアミン、トリ - n - プロピルアミン、トリ - n - ブチルアミン、トリ - n - アミルアミン、トリイソアミルアミン、トリ - n - ヘキシルアミン、トリベンジルアミン、トリフェニルメチルアミン、N , N - ジメチルベンジルアミン、N , N - ジメチルアニリン、N , N - ジエチルアニリン、N , N - ジエチル - o - トライジン、N , N - ジエチル - m - トライジン、N , N - ジエチル - p - トライジン、N , N - ジメチル - - ナフチルアミン、N , N , N' , N' - テトラメチルエチレンジアミン、N , N , N' , N' - テトラエチルエチレンジアミン、ピロリジン、ピペリジン、N - メチルピロリジン、N - メチルピペリジン、ピリジン、ピペラジン、2 - アセチルピリジン、N - ベンジルピペラジン、キノリン、モルホリン等が挙げられる。
20

【 0053 】

前記アミド化合物は、分子中に少なくとも一つの - C (= O) - N < 又は - C (= S) - N < 結合を有する化合物であり、以下に限定されるものではないが、例えば、N , N - ジメチルホルムアミド、N - ジメチルアセトアミド、N - メチルピロリドン、アセトアミド、プロピオンアミド、ベンツアミド、アセトアニリド、ベンツアニリド、N - メチルアセトアニリド、N , N - ジメチルチオホルムアミド、N , N - ジメチル - N , N' - (p - ジメチルアミノ) ベンズアミド、N - エチレン - N - メチル - 8 - キニリンカルボキシアミド、N , N - ジメチルイコチニアミド、N , N - ジメチルメタアクリルアミド、N - メチルフタルイミド、N - フェニルフタルイミド、N - アセチル - - カプロラクタム、N , N , N' , N' - テトラメチルフタルアミド、10 - アセチルフェノキサジン、3 , 7 - ビス (ジメチルアミノ) - 10 - ベンゾイルフェノチアジン、10 - アセチルフェノチアジン、3 , 7 - ビス (ジメチルアミノ) - 10 - ベンゾイルフェノチアジン、N - エチル - N - メチル - 8 - キノリンカルボキシアミド等の他、N , N' - ジメチル尿素、N , N' - ジエチル尿素、N , N - ジメチル - N' , N' - ジメチルエチレン尿素、N , N , N' , N' - テトラメチル尿素、N , N - ジメチル - N' , N' - ジエチル尿素、N , N - ジメチル - N' , N' - ジフエニル尿素等の直鎖状尿素化合物が挙げられる。
40

【 0054 】

前記エポキシ化合物としては、以下に限定されるものではないが、例えば、1 , 3 - ブタジエンモノオキシド、1 , 3 - ブタジエンオキシド、1 , 2 - ブチレンオキシド、2 ,
50

3 - ブチレンオキシド、シクロヘキセンオキシド、1 , 2 - エポキシシクロドデカン、1 , 2 - エポキシデカン、1 , 2 - エポキシエイコサン、1 , 2 - エポキシヘプタン、1 , 2 - エポキシヘキサデカン、1 , 2 - エポキシヘキサデカン、1 , 2 - エポキシオクタデカン、1 , 2 - エポキシオクタタン、エチレングリコールジグリシジルエーテル、1 , 2 - エポキシテトラデカン、ヘキサメチレンオキシド、イソブチレンオキシド、1 , 7 - オクタジエンエポキシド、2 - フェニルプロピレンオキシド、プロピレンオキシド、トランス - スチルベンオキシド、スチレンオキシド、エポキシ化1 , 2 - ポリブタジエン、エポキシ化アマニ油、グリシジルメチルエーテル、グリシジルn - プチルエーテル、グリシジルアリルエーテル、グリシジルメタアクリレート、グルシジルアクリレート等が挙げられる。

10

【0055】

前記オキシム化合物としては、以下に限定されるものではないが、例えば、アセトオキシム、メチルエチルケトンオキシム、ジエチルケトンオキシム、アセトフェノンオキシム、ベンゾフェノンオキシム、ベンジルフェニルケトンオキシム、シクロペントナノンオキシム、シクロヘキサンオキシム、ベンズアルデヒドオキシム等が挙げられる。

【0056】

上述した(D)成分：極性化合物は、1種のみを単独で用いてもよく、2種以上を併用してもよい。

極性化合物としては、アミン化合物やエーテル化合物好ましい。高い水添活性や水素添加用触媒組成物の高いフィード性の点で、アミン化合物がより好ましい。

20

【0057】

<(D)成分：極性化合物の使用量>

本実施形態の水素添加用触媒組成物の水添活性や、フィード性に関する貯蔵安定性の観点から、前記(D)成分と前記(A)成分との質量比(=(D)/(A))は、0.01以上であるものとし、本実施形態の水素添加用触媒組成物の水添活性、フィード性に関する貯蔵安定性、経済性の観点から1.00以下であるものとする。

前記(D)成分と前記(A)成分との質量比(=(D)/(A))は、0.015~0.500の範囲が好ましく、0.020~0.300の範囲がより好ましい。

【0058】

(水素添加用触媒組成物の製造方法)

30

本実施形態の水素添加用触媒組成物は、上述した(A)成分、(B)成分、(C)成分及び(D)成分を、必要に応じて所定の溶媒を用い、混合することにより製造できる。

本実施形態の水素添加用触媒組成物の製造方法においては、高い水添活性、高いフィード性、無色性の観点から、上述した(A)成分、(B)成分、(C)成分及び(D)成分を、(A)成分、(C)成分及び(D)成分の共存下で、最後に(B)成分を添加することが好ましい。このとき、前記(A)成分、(C)成分、(D)成分の添加順序は任意であり、特に限定されるものではない。

【0059】

水素添加用触媒組成物は、予め被水添物の反応系とは別に触媒槽にて調製しておいてから、反応系に導入してもよく、反応系に水素添加用触媒組成物の成分を別々に導入してもよい。

40

本実施形態の水素添加用触媒組成物は、粘度が低く、フィード性が良好で、貯蔵安定性に優れているため、別個の触媒槽にて調製しておいてから、水添反応系に導入する方法に適している。特に、被水添物と、予め調製した水素添加用触媒組成物とを連続的に供給する水素添加方法（連続水添）に好適である。

【0060】

被水添物が共役ジエン系重合体又は共役ジエンとビニル芳香族炭化水素との共重合体の場合であって、当該重合体又は共重合体が、有機アルカリ金属又は有機アルカリ土類金属を開始剤とするリビングアニオン重合により得られる場合は、かかる反応系に水素添加用触媒組成物の成分を導入する際、重合体又は共重合体の活性末端も、前記(B)成分とし

50

て、一部又は全部利用できる。

また、被水添物である重合体又は共重合体の重合後に、活性末端を一部又は全部を、重合失活剤により失活させててもよい。

重合失活剤として過剰のアルコールないしケトン化合物等も好適に用いられる。反応系に水素添加用触媒組成物の成分を別々に導入する場合において、過剰分の失活剤が反応系中に存在する場合は、これらも(D)成分、あるいは(D)成分の一部とみなすことができる。なお、かかる場合において、上述した(D)成分と(A)成分との質量比(= (D) / (A))は、過剰分の失活剤を(D)成分とみなして算出する。

【 0 0 6 1 】

本実施形態の水素添加用触媒組成物を調製する雰囲気は、不活性ガス雰囲気であってもよく、水素雰囲気であってもよい。 10

調製温度ならびに貯蔵温度は - 50 ~ 50 の範囲が好ましく、 - 20 ~ 30 がより好ましい。

調製に要する時間は、調合温度によっても異なるが、25 の条件下では、数秒から 6 0 日であり、1 分から 20 日が好ましい。

【 0 0 6 2 】

本実施形態の水素添加用触媒組成物の製造を、予め被水添物の反応系とは別に触媒槽で行う場合、本実施形態の水素添加用触媒組成物を構成する(A)成分、(B)成分、(C)成分、及び(D)成分は、不活性有機溶媒中に溶解させた溶液として使用する方が扱い易く好適である。 20

前記不活性有機溶媒としては、水添反応のいかなる関与体とも反応しない溶媒を用いる。好ましくは水添反応に用いる溶媒と同一の溶媒である。

【 0 0 6 3 】

本実施形態の水素添加用触媒組成物の製造を、予め被水添物の反応系とは別に触媒槽で行う場合、水添を行う際には、製造した水素添加用触媒組成物を、被水添物が収納されている水添反応器(水添槽)に移送する必要があるが、この際は水素雰囲気下で行うことが好ましい。

移送する時の温度は、 - 30 ~ 100 の温度が好ましく、より好ましくは - 10 ~ 50 の温度にて水添反応直前に添加するのが好ましい。

高い水添活性及び水添選択性を発現するための各成分の混合比率は、成分(B)の金属モル数と、成分(A)の金属(Ti)モル数との比率(以下、Metal(B) / Metal(A)モル比)で約 20 以下の範囲であることが好ましい。 30

Metal(B) / Metal(A)のモル比 = 0 、すなわち Metal(B) が存在しない場合においても熱還元により定量的な水添を行うことは可能であるが、より高温・長時間、高触媒量を要するため、Metal(B) が存在している方が好ましい。

Metal(B) / Metal(A)モル比が 20 以下であることにより、実質的な活性向上に関与しない高価な触媒成分(B)を過剰に用いることが防止でき、経済的に優れ、不必要的副反応を防止することができる。

Metal(B) / Metal(A)モル比 = 0 . 5 ~ 10 の範囲となるように、成分(A)と成分(B)との混合比率を選択することにより、水素添加用触媒組成物の水添活性が向上するため、当該モル比が最も好適である。 40

【 0 0 6 4 】

被水添物がリビングアニオン重合で得られたリビング重合体である場合は、リビング末端が還元剤として作用するため、リビング活性末端を有する重合体を水添する際は、前述した最適な Metal(B) / Metal(A)モル比を達成するため、種々の活性水素やハロゲンを有する化合物でリビング活性末端を失活させておくのが好ましい。

かかる活性水素を有する化合物としては、水及びメタノール、エタノール、n - プロパノール、n - ブタノール、sec - ブタノール、t - ブタノール、1 - ペンタノール、2 - ペンタノール、3 - ペンタノール、1 - ヘキサノール、2 - ヘキサノール、3 - ヘキサノール、1 - ヘプタノール、2 - ヘプタノール、3 - ヘプタノール、4 - ヘプタノール、 50

オクタノール、ノナノール、デカノール、ウンデカノール、ラウリルアルコール、アリルアルコール、シクロヘキサノール、シクロ pentanone、ベンジルアルコール等のアルコール類、フェノール、o - クレゾール、m - クレゾール、p - クレゾール、p - アリルフェノール、2 , 6 - ジ - t - ブチル - p - クレゾール、キシレノール、ジヒドロアントラキノン、ジヒドロキシクマリン、1 - ヒドロキシアントラキノン、m - ヒドロキシベンジルアルコール、レゾルシノール、ロイコアウリン等のフェノール類が挙げられる。

また、酸として酢酸、プロピオン酸、酪酸、イソ酢酸、ペンタン酸、ヘキサン酸、ヘプタン酸、デカリン酸、ミリスチン酸、ステアリン酸、ベヘン酸、安息香酸等の有機カルボン酸等を挙げることができる。

また、ハロゲンを有する化合物として塩化ベンジル、トリメチルシリルクロライド(ブロマイド)、t - ブチルシリルクロライド(ブロマイド)、メチルクロライド(ブロマイド)、エチルクロライド(ブロマイド)、プロピルクロライド(ブロマイド)、n - ブチルクロライド(ブロマイド)等を挙げることができる。

これらは1種のみを単独で使用してもよく、2種以上を併用してもよい。

【0065】

[水素添加用触媒組成物を用いた水素添加方法]

本実施形態においては、上述した本実施形態の水素添加用触媒組成物の存在下で、オレフィン性不飽和二重結合含有化合物を、水素と接触させることにより水素添加を行う。

本実施形態の水素添加用触媒組成物は、オレフィン性不飽和二重結合を有する全ての化合物の水素添加を行う工程において、用いることができる。

オレフィン性不飽和二重結合を有する化合物としては、以下に限定されるものではないが、例えば、エチレン、プロピレン、ブテン、ベンテン、ヘキセン、ヘプテン、オクテン等の異性体等の脂肪族オレフィン；シクロpentanone、メチルシクロpentanone、シクロpentadien、シクロヘキセン、メチルシクロヘキセン、シクロヘキサジエン等の脂環式オレフィン；スチレン、ブタジエン、イソプレン等のモノマー類；不飽和脂肪酸及びその誘導体、不飽和液状オリゴマー等、分子中に少なくとも一つのオレフィン性不飽和二重結合含有低分子重合物等が挙げられる。

【0066】

また、本実施形態の水素添加用触媒組成物は、共役ジエン系重合体、共役ジエンとオレフィン单量体との共重合体の、オレフィン性不飽和二重結合の選択的水添にも適用できる。

ここで言う選択的水添とは、共役ジエン系重合体、共役ジエンとオレフィン单量体との共重合体の共役ジエン部分のオレフィン性不飽和二重結合を選択的に水添することであり、具体的には、前記オレフィン单量体としてビニル芳香族化合物、例えばビニル芳香族炭化水素を用いた場合、芳香環の炭素 - 炭素二重結合は実質的に水添されないことを意味する。

共役ジエン系重合体、共役ジエンとオレフィン单量体との共重合体のオレフィン性不飽和二重結合の選択的水添物は、弾性体や熱可塑性弾性体として工業的に有用である。

【0067】

前記被水添物である共役ジエン系重合体の製造に用いられる共役ジエンとしては、一般的には4～約12個の炭素原子を有する共役ジエンが挙げられる。

以下に限定されるものではないが、例えば、1 , 3 - ブタジエン、イソプレン、2 , 3 - ジメチル - 1 , 3 - ブタジエン、1 , 3 - ペンタジエン、2 - メチル - 1 , 3 - ペンタジエン、1 , 3 - ヘキサジエン、4 , 5 - ジエチル - 1 , 3 - オクタジエン、3 - ブチル - 1 , 3 - オクタジエン等が挙げられる。

工業的に有利に展開でき、物性の優れた弾性体を得る観点からは、1 , 3 - ブタジエン、イソプレンが好ましい。

ブタジエン部分のミクロ構造には、1 , 2 結合と1 , 4 結合(シス + トランス)があるが、本実施形態の水素添加用触媒組成物は、どちらも定量的に水添することができる。

また、イソプレン部分には、1 , 2 結合、3 , 4 結合の側鎖と1 , 4 結合(シス + トラン

10

20

30

40

50

ンス)の主鎖にオレフィン性不飽和結合があるが、本実施形態の製造方法により得られる水素添加用触媒組成物は、いずれも定量的に水添することができる。

本実施形態の水素添加用触媒組成物によって水添した化合物の構造及び水添率は、¹⁰ H-NMRによって測定することができる。

本実施形態の水素添加用触媒組成物を用いた水素添加方法によると、ブタジエン部分の1,2結合、1,4結合、及びイソプレン部分の1,2結合、3,4結合の側鎖を特に選択的に水添させることができることである。

水素添加用触媒組成物で水添される共役ジエン系重合体の主成分として、1,3-ブタジエンを選択した場合、特に低温から室温でエラストマー弾性を発現させるには、被水添物のブタジエンユニット部分のミクロ構造として1,2結合の量は8%以上であることが好ましく、より好ましくは20%以上であり、さらに好ましい範囲は30~80%である。

また、水素添加用触媒組成物で水添される被水添物の共役ジエン系重合体の主成分としてイソプレンを選択した場合には同様の理由により、イソプレンユニットのミクロ構造として1,4結合の量は50%以上であることが好ましく、より好ましくは75%以上である。

【0068】

共役ジエン単位の不飽和二重結合のみを選択的に水添する効果を十分に發揮し、工業的に有用で価値の高い弾性体や熱可塑性弾性体を得るためにには、被水添物としては、共役ジエンとビニル芳香族炭化水素との共重合体が特に好ましい。共役ジエンの少なくとも一種と共重合可能なビニル芳香族炭化水素としては、例えば、スチレン、tert-ブチルスチレン、-メチルスチレン、p-メチルスチレン、ジビニルベンゼン、1,1-ジフェニルエチレン、N,N-ジメチル-p-アミノエチルスチレン、N,N-ジエチル-p-アミノエチルスチレン等が挙げられ、特にスチレン及び/又は-メチルスチレンが好ましい。

具体的な共重合体の例としては、ブタジエン/スチレン共重合体、イソプレン/スチレン共重合体、ブタジエン/イソプレン/スチレン共重合体等が工業的価値の高い水添共重合体を与えるので好適である。これら共重合体はランダム、ブロック、テーパードプロック共重合体等、特に限定されない。

本実施形態の水素添加用触媒組成物を用い、後述する好ましい水添条件を選択すると、かかる共重合体中のビニル芳香族炭化水素ユニットの炭素-炭素二重結合(芳香環)の水添は実質的に起こらない。

【0069】

本実施形態の水素添加用触媒組成物を用いた水添反応は、オレフィン性不飽和二重結合を有する化合物を、不活性有機溶媒に溶解した溶液中において水素と接触させて行うことが好ましい。

ここで言う「不活性有機溶媒」とは、溶媒が水添反応のいかなる関与体とも反応しないものを意味する。以下に限定されるものではないが、例えば、n-ペンタン、n-ヘキサン、n-ヘプタン、n-オクタンの如き脂肪族炭化水素類、シクロヘキサン、シクロヘプタン、シクロヘプタンの如き脂環式炭化水素類、ジエチルエーテル、テトラヒドロフランの如きエーテル類の単独もしくは混合物が挙げられる。また、ベンゼン、トルエン、キレン、エチルベンゼンの如き芳香族炭化水素も、選択された水添条件下で芳香族二重結合が水添されない時に限って使用することができる。

水添反応は、一般的には、上記被水添物溶液を、水素又は不活性雰囲気下、所定の温度に保持し、攪拌下又は不攪拌下にて水素添加用触媒組成物を添加し、ついで水素ガスを導入して所定圧に加圧することによって実施される。不活性雰囲気とは、例えば窒素、ヘリウム、ネオン、アルゴン等の水添反応のいかなる関与体とも反応しない雰囲気を意味する。空気や酸素は触媒成分を酸化したりして水素添加用触媒組成物の失活を招くので好ましくない。

本実施形態の水素添加用触媒組成物は、粘度が低く、フィード性が良好で、貯蔵安定性

10

20

30

40

50

に優れるため、水添反応器に、被水添物と水素添加用触媒組成物とを連続的に供給する水素添加方法（連続水添）に好適である。

【0070】

水添工程における、水素添加用触媒組成物の添加量は、成分（A）のモル量換算で、被水添物 100 g 当り 0.001 ~ 20 ミリモルの範囲が好ましい。

この添加量範囲であれば、被水添物のオレフィン性不飽和二重結合を優先的に水添することが可能で、共重合体中の芳香環の二重結合の水添は実質的に起こらないので極めて高い選択的水添が実現される。

成分（A）のモル量換算で、被水添物 100 g 当り 20 ミリモルを超える量の水素添加用触媒組成物を添加した場合においても水添反応は可能であるが、必要以上の触媒使用は不経済となり、水添反応後の触媒脱灰、除去が複雑となる等不利となる。10

また選択された条件下で重合体の共役ジエン単位の不飽和二重結合を定量的に水添する好ましい水素添加用触媒組成物の添加量は、成分（A）のモル量換算で、被水添物 100 g 当り 0.01 ~ 5 ミリモルである。

【0071】

水添反応は、攪拌下で行なうことがより好ましく、これにより導入された水素を十分迅速に被水添物と接触させることができる。

【0072】

水添反応は、0 ~ 200 の温度範囲で実施することが好ましい。

0 以上で行なうことにより十分な水添速度で行なうことができ、多量の触媒を要することを防止できる。また 200 以下で行なうことにより、副反応、分解反応、ゲル化や、これらの併発を防止でき、さらには水素添加用触媒組成物の失活、水添活性が低下を防止できる。20

より好ましい温度範囲は 20 ~ 180 である。

【0073】

水添反応に使用される水素の圧力は、1 ~ 100 kgf/cm² が好適である。

1 kgf/cm² 未満では水添速度が遅くなつて、十分な水添率が得られないおそれがあり、100 kgf/cm² を超える圧力では昇圧と同時に水添反応がほぼ完了してしまい、不必要的副反応やゲル化を招来するおそれがある。

より好ましい水添水素圧力は 2 ~ 30 kgf/cm² であるが、水素添加用触媒組成物添加量等との相関で最適水素圧力は選択され、実質的には前記水素添加用触媒組成物量が少量になるに従つて水素圧力は高圧側を選択して実施することが好ましい。30

また、水添反応時間は、通常数秒 ~ 50 時間である。

水添反応時間及び水添圧力は所望の水添率によって上記範囲内で適宜選択して実施される。

【0074】

上述した水添工程により、オレフィン化合物のオレフィン性不飽和二重結合、共役ジエン系共重合体及び共役ジエンとビニル芳香族炭化水素との共重合体中のオレフィン性不飽和二重結合は目的に合わせて任意の水添率が得られる。

【0075】

本実施形態の水素添加用触媒組成物を用いて水添反応を行つた後、水添物が含有されている溶液から、水添物を、蒸留、沈澱等の化学的又は物理的手段によつて容易に分離することができる。

特に、被水添物が重合体である場合、水添反応を行つた重合体溶液からは、必要に応じて水素添加用触媒組成物の残渣を除去し、水添された重合体を溶液から分離することができる。

分離の方法としては、例えば、水添後の反応液にアセトン又はアルコール等の水添重合体に対する貧溶媒となる極性溶媒を加えて水添重合体を沈澱させて回収する方法、反応液を攪拌下、熱湯中に投入後、溶媒と共に水添重合体を蒸留回収する方法、又は直接反応液を加熱して溶媒を留去して水添重合体を回収する方法等を挙げることができる。4050

【実施例】**【0076】**

以下、具体的な実施例と比較例を挙げて本発明について詳細に説明するが、本発明は以下の実施例に限定されるものではない。

【0077】

実施例及び比較例において用いた水素添加用触媒組成物の構成成分について以下に示す。

【0078】**〔(A)成分〕**

<(A-1)：ビス((5)-シクロペニタジエニル)チタニウムジ(p-トリル)の合成> 10

攪拌機、滴下漏斗、及び還流冷却器を備えた1L容量の三つ口フラスコに無水エーテル200mLを加えた。

装置を乾燥ヘリウムで乾燥し、リチウムワイヤー小片17.4g(2.5モル)をフラスコ中に切り落とし、エーテル300mL、p-プロモトルエン171g(1モル)の溶液を室温で少量滴下した後、還流下で除々にp-プロモトルエンのエーテル溶液を全量加えた。

反応終了後、反応溶液をヘリウム雰囲気下にてろ過し、無色透明なp-トリルリチウム溶液を得た。

乾燥ヘリウムで置換した攪拌機、滴下漏斗を備えた2L三つ口フラスコ、ビス((5)-シクロペニタジエニル)チタニウムジクロリド99.6g(0.4モル)、及び無水エーテル500mLを加えた。 20

先に合成したp-トリルリチウムのエーテル溶液を室温攪拌下にて約2時間で滴下した。

反応混合物を空气中でろ別し、不溶部をジクロロメタンで洗浄後、ろ液及び洗浄液を合わせ減圧下にて溶媒を除去した。

残留物を少量のジクロロメタンに溶解後、石油エーテルを加えて再結晶を行った。

得られた結晶をろ別し、ろ液は再び濃縮させ上記操作を繰り返しビス((5)-シクロペニタジエニル)チタニウムジ(p-トリル)を得た。

収率は87%であった。 30

得られた結晶は橙黄色針状である、トルエン、シクロヘキサンに対する溶解性は良好であり、融点145、元素分析値：C, 80.0、H, 6.7、Ti, 13.3であった。

【0079】

<(A-2)：ビス((5)-シクロペニタジエニル)チタニウムジ(フェニル)の合成>

上述した(A-1)で使用したp-プロモトルエンの代わりにプロモベンゼン157g(1モル)用いた以外は、上述した(A-1)と同様に合成を行い、フェニルリチウムを得た。当該フェニルリチウムを用い、上述した(A-1)と同様の工程により、ビス((5)-シクロペニタジエニル)チタニウムジフェニルを得た。収量は120g(収率90%)であった。 40

得られた結晶は橙黄色針状であり、トルエン、シクロヘキサンに対する溶解性はやや良好であり、融点147、元素分析値：C, 79.5、H, 6.1、Ti, 14.4であった。

【0080】

<(A-3)：ビス((5)-シクロペニタジエニル)チタニウムジ(3,4-キシリル)の合成>

上述した(A-1)で使用したp-プロモトルエンの代わりに4-プロモ-o-キシレン(1モル)を用いた以外は、上述した(A-1)と同様に合成を行い、ビス((5)-シクロペニタジエニル)チタニウムジ(3,4-キシリル)を得た。収率は83%であ

50

った。

得られた結晶は黄色針状晶であり、トルエン、シクロヘキサンに対する溶解性は良好であり、融点は 155、元素分析値：C, 80.6、H, 7.2、Ti, 12.2 であった。

【0081】

< (A-4) : ビス((5)-1,3-ジメチルシクロペニタジエニル)チタニウムジクロリド >

日本ファインケミカル社製試薬をジクロロメタン中で再結晶させたものを用いた。

【0082】

〔(B)成分〕

(B-1) : トリエチルアルミニウム；ヘキサン溶液（東ソー・アクゾ社製）をそのまま用いた。

(B-2) : sec-ブチルリチウム；ヘキサン溶液（関東化学製試薬）を不活性雰囲気下で濾別し、黄色透明な部分を用いた。

【0083】

〔(C)成分〕

下記(C-1)～(C-4)は、市販の特級試薬を用いた。

(C-1) : ミルセン（分子量 136、(C-1) 1モルに対する不飽和基数 3モル）

(C-2) : イソプレン（分子量 68、(C-2) 1モルに対する不飽和基数 2モル）

(C-3) : オクテン（分子量 112、(C-3) 1モルに対する不飽和基数 1モル）

(C-4) : 1,7-オクタジエン（分子量 110、(C-4) 1モルに対する不飽和基数 2モル）

(C-5) : ポリイソプレン（GPCにより測定した数平均分子量 3100、(C-5) 1モルに対する不飽和基数 46モル）

【0084】

〔(D)成分〕

すべて、市販の特級試薬を使用した。

(D-1) : テトラヒドロフラン

30

(D-2) : 酢酸エチル

(D-3) : N, N, N', N' - テトラメチルエチレンジアミン

【0085】

〔水素添加用触媒組成物の調合（実施例1～15）、（比較例1～5）〕

(A)、(B)、(C)、(D)成分を、下記表1に示す比率で、最終濃度が5質量%のシクロヘキサン溶液になるように添加した。

各成分の添加順序として、(A)成分、(C)成分、(D)成分の共存下に、最後に(B)成分を添加した。

【0086】

〔ポリマー〕

(スチレン-ブタジエン-スチレンブロック共重合体の重合)

7Lのオートクレーブ中に、シクロヘキサン4000g、スチレンモノマー150gとn-ブチルリチウム1.10g及びテトラヒドロフラン25gを加え、攪拌下60にて3時間重合し、次いで1,3-ブタジエンモノマーを700g加えて60で3時間重合した。

最後にスチレンモノマー150gを添加し、60で3時間重合した。

活性末端を水で失活させ、60で12時間真空乾燥を行った。

得られたスチレン-ブタジエン-スチレンブロック共重合体は完全ブロック共重合体で、結合スチレン含有量30質量%、ブタジエン単位の1,2-ビニル結合含有率45mol%、GPC（ポリスチレン換算分子量）で測定した重量平均分子量は約6万であった。

40

50

なお、1,2-ビニル結合量はNMRで測定した。

【0087】

[評価方法]

<水添率>

後述する水添ポリマーの製造例である〔製造例1～15〕、〔比較製造例1～5〕に示すようにポリマーの水添反応を行い、得られた水添ポリマーの水添率を下記NMRで測定した。

実施例1～15、比較例1～5の水素添加用触媒組成物を調製後、直後（初期）に用いた場合と、調製後に30～30日間保管した後に用いた場合の両方を評価した。

共に、水添率は高い方が良く、99.5%以上を、99.0%以上99.5%未満を
10
、97.0%以上99.0%未満を、97%未満を×とした。

(NMR: 1,2-ビニル結合含有量と水素添加率の測定方法)

共役ジエン中の1,2-ビニル結合含有量と不飽和基の水素添加率は、核磁気共鳴スペクトル解析（NMR）により、下記の条件で測定した。

水添反応後に、大量のメタノール中に沈澱させることで、水添重合体を回収し、次いでアセトン抽出・真空乾燥を行い、¹H-NMR測定を行った。

測定機器：¹NM-LA400（JEOL製）

溶媒：重水素化クロロホルム

測定サンプル：ポリマーを水素添加する前後の抜き取り品

サンプル濃度：50mg/mL

20

観測周波数：400MHz

化学シフト基準：TMS（テトラメチルシラン）

パルスディレイ：2.904秒

スキャン回数：64回

パルス幅：45°

測定温度：26

【0088】

<フィード性>

実施例1～15、比較例1～7の水素添加用触媒組成物を調製後、30～30日間保管した後に、フィード性を、1リットルの分液ロート（SPC29、柴田科学製）を用い、水素添加用触媒組成物を1リットル流して評価した。

30

詰まりが無く、連続的に流れたものが良くとし、断続的に流れた場合をとし、詰まつた場合を×とした。

【0089】

<水添ポリマーの黄変化抑制>

調製後に30～温度環境下で30日間保管した水素添加用触媒組成物を用いて、上記の<水添率>と同じ条件で水添反応を行った。すなわち、後述する水添ポリマーの製造例である〔製造例1～15〕、〔比較製造例1～5〕に示すようにポリマーの水添反応を行った。その後に、メタノール水を添加し、次に安定剤としてオクタデシル-3-(3,5-ジ-t-ブチル-4-ヒドロキシフェニル)プロピオネートを、上述のようにして製造した水添ポリマー100質量部に対して0.3質量部添加し、溶剤を乾燥した。得られた水添ポリマーを、200～10分間プレス成型した時の変色を目視で観察した。

40

色がつかない方が良くとし、色がついた場合を×とした。

【0090】

[製造例1～15]、[比較製造例1～5]

上述のようにして製造した〔ポリマー〕：スチレン-ブタジエン-スチレンブロック共重合体を、水素置換した1000mLの耐圧オートクレーブに、それぞれ80gとなるよう精製乾燥させたシクロヘキサン溶液として加えた（溶液濃度10質量%）。

上述のようにして製造した実施例1～15、比較例1～5の水素添加用触媒組成物を、前記ポリマーに対してTi量が150ppmになるように、耐圧オートクレーブに打ち込

50

み、水素圧 5 k g f / c m²で加圧した。

攪拌下、100℃で20分間水添反応を行った。

実施例1～15、比較例1～5の水素添加用触媒組成物を用いて、上記のようにして製造した水添ポリマーを、それぞれ、製造例1～15、比較製造例1～5のポリマーとした。

下記表1に、製造例1～15、比較製造例1～5の水添ポリマーの水添率、実施例1～15、比較例1～5の水素添加用触媒組成物のフィード性、前記製造例1～15、製造比較例1～5の水添ポリマーの黄変化抑制の評価について、それぞれ示した。

【0091】

【表1】

	水素添加用触媒組成物						評価結果			
	(A)			(B)		(C)	(D)		水素添加用触媒組成物のフィード性	
	種類	(mmol)	種類	(mmol)	種類	(mmol)	種類	(mmol)	初期	30日後
実施例	1 A-1	0.015	B-1	0.0375	C-1	2	D-1	0.3	○	○
	2 A-2	0.015	B-1	0.0375	C-1	2	D-1	0.3	○	○
	3 A-3	0.015	B-1	0.0375	C-1	2	D-1	0.3	○	○
	4 A-4	0.015	B-1	0.0375	C-1	2	D-1	0.3	○	○
	5 A-1	0.015	B-1	0.0375	C-1	2	D-1	0.015	○	△
	6 A-1	0.015	B-1	0.0375	C-1	2	D-1	0.5	○	△
	7 A-1	0.015	B-1	0.0375	C-1	2	D-1	0.9	○	△
	8 A-1	0.015	B-1	0.0375	C-1	4	D-1	0.3	○	△
	9 A-1	0.015	B-2	0.0375	C-1	2	D-1	0.3	◎	○
	10 A-1	0.015	B-1	0.0375	C-2	2	D-1	0.3	○	△
	11 A-1	0.015	B-2	0.0375	C-2	2	D-1	0.3	○	○
	12 A-1	0.015	B-1	0.0375	C-3	2	D-1	0.3	○	△
	13 A-1	0.015	B-1	0.0375	C-4	2	D-1	0.3	○	○
	14 A-1	0.015	B-1	0.0375	C-1	2	D-2	0.3	○	○
	15 A-1	0.015	B-1	0.0375	C-1	2	D-3	0.3	○	○
比較例	1 A-1	0.015	B-1	0.0375	-	-	-	-	△	×
	2 A-1	0.015	B-1	0.0375	C-1	2	-	-	△	×
	3 A-1	0.015	B-1	0.0375	C-1	2	D-1	1.5	△	×
	4 A-1	0.015	B-1	0.0375	C-1	10	-	-	△	×
	5 A-4	0.015	B-1	0.0375	C-5	2	D-1	0.3	△	×

【0092】

表1中に示す、水素添加用触媒組成物の構成成分について以下に示す。

(A) 成分

(A-1) : ビス((5)-シクロペントジエニル)チタニウムジ(p-トリル)

(A-2) : ビス((5)-シクロペントジエニル)チタニウムジ(フェニル)

(A-3) : ビス((5)-シクロペントジエニル)チタニウムジ(3,4-キシリル)

10

20

30

40

(A - 4) : ビス((5) - 1 , 3 -ジメチルシクロペンタジエニル)チタニウムジクロリド

(B) 成分

- (B - 1) : トリエチルアルミニウム
- (B - 2) : s e c - プチルリチウム

(C) 成分

- (C - 1) : ミルセン
- (C - 2) : イソブレン
- (C - 3) : オクテン
- (C - 4) : 1,7 - オクタジエン
- (C - 5) : ポリイソブレン

(D) 成分

- (D - 1) : テトラヒドロフラン
- (D - 2) : 酢酸エチル
- (D - 3) : N, N, N', N' - テトラメチルエチレンジアミン

【0093】

(A) 成分、(B) 成分、(C) 成分、(D) 成分を含み、かつ(C) 成分と(A) 成分との質量比($= (C) / (A)$)が、0.1~4.0、(D) と(A)との質量比($= (D) / (A)$)が、0.01~1.00の範囲である実施例1~15の水素添加用触媒組成物は、水添活性が高く、フィード性が良好で貯蔵安定性が高く、無色性に優れた水添オレフィン化合物を製造できることが分かった。

【0094】

本出願は、2012年9月21日に日本国特許庁に出願された日本特許出願(特願2012-208283)に基づくものであり、その内容はここに参照として取り込まれる。

【産業上の利用可能性】

【0095】

本発明の水素添加用触媒組成物は、ポリプロピレンやポリエチレンの改質剤として用いられる水添重合体化合物を製造するための水添工程において用いる水素添加用触媒組成物として、産業上の利用可能性を有している。

10

20

フロントページの続き

(72)発明者 笹谷 栄治

東京都千代田区神田神保町一丁目105番地

(72)発明者 仁田 克徳

東京都千代田区神田神保町一丁目105番地

審査官 延平 修一

(56)参考文献 特開平08-041081(JP,A)

特開平08-033846(JP,A)

特開平02-172537(JP,A)

特開2010-059415(JP,A)

特開平08-027216(JP,A)

特表2003-524515(JP,A)

国際公開第2002/002650(WO,A1)

米国特許出願公開第2008/0146733(US,A1)

Yin-Heng FAN et al., Extremely active catalysts for the hydrogenation of terminal alkenes, Journal of Catalysis, published online 3 January 2002, Vol.205, pp.294-298

(58)調査した分野(Int.Cl., DB名)

B01J 21/00 - 38/74

WPI

JST Plus / JMED Plus / JST7580 (JDream III)

CAPLus / REGISTRY (STN)

Science Direct

Cinii